福永武彦『草の花』における転移と賭けの問題
―ラカンの精神分析理論とドゥルーズの超越論的哲学に依拠して―

桑原　旅人

要旨

本稿は、「愛される者」の「愛する者」への転換というラカン的な意味での転移概念およびドゥルーズにおける賭けとしての偶然概念に依拠しつつ、出版年の近い『愛の試み』における作家本人の言葉も借りながら、福永武彦『草の花』を再解釈する試みである。先行研究の多くは、汐見茂思を藤木兄妹に対し、加害者的な愛を向けるエゴイストであるとして、半ば一方的なかたちで批難してきた。それに対し、本稿は汐見の愛という偶然性への「賭け」が千枝子を愛する者へと変容させたという事態に着目することによって、エゴイストではなく、むしろ倫理に準ずる者としての汐見茂思という人物造形を浮かび上がらせた。

キーワード：福永武彦,『草の花』，ラカン，ドゥルーズ, 転移, 賭け

1. はじめに

本稿は、ジャック・ラカンが「転移」の問題を重点的に扱った講義におけるプラトン『饗宴』註釈とドゥルーズの『差異と反復』における偶然に関する超越論的哲学を理論的な支柱として文学理論のささやかな更新を目論みつつ、それと共に出版年の近い『愛の試み』[1]における作家本人の言葉も借りながら、福永武彦『草の花』[2]を再解釈する試みである。後述する先行研究の多くは、汐見茂思を藤木兄妹に対し、加害者的な愛を向けるエゴイストであり、彼の孤独を身勝手なものとして、半ば一方的なかたちで批難してきた。一例を挙げれば、福永の実人生からこの作品を読み解こうとした田口耕平は、『「草の花」の成立――福永武彦の履歴』において、汐見が千枝子を抱こうとしなかった理由を忍との記憶を守るためであったと断定した上で、次のように言う。

> その純潔な記憶を守るために汐見は孤独の中に籠もるのである。「英雄の孤独」と名付けたその孤独は千枝子の精一杯の慈母的な愛を否定しなければ成り立たない身

勝手なものであった。[3]

他にもたとえば、小佐井伸二も「「草の花」の汐見は、しかし、プラトニックな恋愛がその根底にもつこのようなエゴイズムに気がつかなかった」[4]と非難している。さらに言えば、白川正芳もまた、「汐見の不幸は、自分の〝愛〟が相手を愛するというより、自己を愛するエゴイズムだと気付いていないところにある」[5]と切って捨てている。それに対し、我々はラカンにおける転移の定義とドゥルーズの超越論的哲学における偶然の概念を取り入れることによって、エゴイストではなく、むしろ倫理に準ずる者としての汐見茂思という人物造形を浮かび上がらせたい。また、先行研究では、「かにかくに」、「慰霊歌」という前史となる作品を持ち、私小説的な香りも濃厚な「第一の手帳」における汐見茂思の藤木忍へのプラトン主義的な思慕が強調され、よりロマンとしての純度が高いにもかかわらず、「第二の手帳」における藤木の妹千枝子との関係は、あくまで前者の延長線上に過ぎないものと解釈されてきた。したがって、その根本的な差異が十分に議論され尽くしているとは言い難い。たとえ汐見の藤木兄妹に対する対応がそれぞれで異なると指摘していたとしても、共通して汐見の彼らに対する強引な接近を糾弾するという仕方での批判が常套句になっている。しかしながら、「愛する者」の「愛される者」への転換という、ラカン的な意味での転移概念と「賭け」による偶然を肯定するドゥルーズの超越論的哲学の本質を考慮に含むと、汐見だけを加害者として捉えることには問題が生じる。なぜなら、彼を一方的な加害者としてしまうと、「愛される者」として居るだけで、決して「愛する者」にはならなかった忍の脆弱さと瑕疵が問われなくなるからであり、また千枝子が「愛される者」から「愛する者」へと変容するという出来事、そして何より偶然へと賭ける汐見の超越論的な企投をも見逃してしまうからだ。

2. ラカンにおける「転移」の教説

それでは、まず転移に関する教説の中心となるラカンのプラトン『饗宴』註釈を読み解いていこう。『饗宴』は、一般的にソクラテスがディオティマという女性に仮託することによって語らせた美のイデアという主題を中心に据えながら説明される傾向にある。しかしラカンは、ソクラテスと古代ギリシアの英雄アルキビアデス[6]の関係、そしてこの物語の最後の場面におけるアルキビアデスの乱入に『饗宴』の本質的な賭金を見出そうとしている。ラカンは、両者の関係を「愛する者」と「愛される者」との関係として整

理する[7]。それではラカンが愛の問題を考えるとき、両者を峻別する基準はどのようなものであるのだろうか。

まず「愛する者」を特徴づけるのは、「本質的に欠如していること（essentiellement ce qui lui [l'amant] manque）」であり、「[…] 無意識のものである不知をとくに強調して、彼は自身に欠けているものを知らない（[…] il ne sait pas ce qui lui manque, avec cet accent particulier de l'inscience qui est celui de l'inconscient）」存在であるということである[8]。一方で「愛される者」は、「[…] 彼がもっていること、隠されてもっていることを知らない者であり、そうであるがゆえに、彼の魅力を為すものを知らない者として位置づけられる（[…] situé comme celui qui ne sait pas ce qu'il a, ce qu'il a de caché, et qui fait son attrait）[9]。つまり、「愛する者」とは欠如の主体であり、「愛される者」とは、充足した主体なのである。

ラカンが強調するのは、「その本質において、愛する者と愛される者を構成するこれら二項のあいだに、[…] いかなる一致もない（Entre ces deux termes qui constituent, dans leur essence, l'amant et l'aimé, [...] il n'y a aucune coïncidence）」[10]ということである。この点が重要であるのは、この不知をめぐる不一致、不均等性をラカンは「隔差（disparité）」[11]と呼び、愛の関係において生じる「転移」の源に置いているからである。ラカンにおいて愛される者、すなわち欲望を喚起する者によって、ある主体が愛する者となること、つまり欲望する主体になることは、つねに転移を呼び起こすものである。そしてその原因となるのは、主体間の互恵性ではなく、永遠に結びつくことのない「愛する者」と「愛される者」に亀裂を入れる不調和としてのこの隔たりなのである。ラカンは、「欠如の主体であるかぎりでの「愛する者」の機能が、愛される対象の機能の座に来て、それと置き換わるかぎりにおいてこそ、愛の意味作用が生じる（C'est en tant que la fonction de l'*érastès*, de l'aimant, pour autant qu'il est le sujet du manque, vient à la place, se substitue à la fonction de l'*érôménos*, l'objet aimé, que se produit la signification de l'amour）」[12]と言う。つまり、この劇的な立場の入れ替わりの瞬間にこそ、愛は生起するものなのだ。これをソクラテスとアルキビアデスの関係に置き換えてみよう。アルキビアデスは、つねに「愛される者」として、すなわち「欲望される者」ないし「欲望を喚起する者」として生きてきた。ソクラテスとの関係においてもはじめはそのようなものだった。しかしながら、ソクラテスと親密になっていくにつれ、アルキビアデスは彼に惹かれていく。だが、根本的に「愛される者」として生きてきた彼自身が能動者となって言い寄るという技術は拙いもので

あった。実際に彼はソクラテスを誘うが拒絶される（217D）[13]。この欲望するアルキビアデスが求めたのは、万人の誰もが彼を愛することではなくて、ソクラテスを自分一人のものにしたいということであった[14]。そして、彼は公然と饗宴の場に乱入し、いかに自らがソクラテスに性的に愛されなかったのかを滔々と語る。ここでラカンは、「[…] 愛について語るためには、本当に、あらゆる羞恥の境界を越えてしまっていなくてはならない（[…] il faut vraiment avoir franchi toutes les bornes de la pudeur pour parler de l'amour）」[15]とつけ加えている。

それでは、この「愛する者（＝欲望する者）」から「愛される者（＝欲望される者）」への置き換えであるこの事態は、最終的にどのような結末に行き着くのか。ラカンは、「[…] ソクラテスについて言われていることのすべて、それは彼が無尽蔵の徹底的な欲望者だということである。しかし、ソクラテスがアルキビアデスのスキャンダラスで荒れ狂う、酩酊した公然の攻撃に直面して、欲望される者の立場に姿を現すことになるとき、もはや完全にそこには誰もいなくなる（[…] tout ce que l'on nous dit de lui, c'est qu'il est désirant à tout crin, inépuisable. Mais quand il s'agit qu'il se montre dans la position de désiré en face de l'agression publique, scandaleuse, déchaînée, ivre, d'Alcibiade, il n'y a littéralement plus personne）」[16]と言う。実際にこの後、二人の関係は完全に絶たれてしまう[17]。しかしながら、この事実は彼らの転移が成功したことの証でもある。というのも、長きに渡って憎しみもなく、自存する愛のみによってお互いを高めあい、尊重し合うような関係は、実際には愛とは何の関係もないとラカンは考えていたからである。二人の関係が破滅的なしかたで壊れなかったのであれば、それらはすべて何か別のもの、おそらくは財産によって結ばれているに過ぎない。じじつ、ラカンは「分析家から見れば、金持ちには愛することに大きな困難があることはまったく確かである（il est tout à fait certain pour un analyste qu'il y a chez le riche une grande difficulté d'aimer）」[18]と述べている。そして、「富裕さは不能をもたらす傾向がある（la richesse au une tendance à rendre impuissant）」とつけ加える。なぜなら、「金持ちは、金持ちなのだから、買わざるをえない（le riche est forcé d'acheter, puisqu'il est riche）」[19]からである。また、ラカンにおいて、「愛とは持っていないものを与えること」[20]であり、「愛される者」は、最終的に「愛する者」として持っていないものを与えることになる。そしてこの置き換えが起きたときに、かつて「愛される者」であった対象は、「愛する者」を追いかけるが、かつて「愛する者」だった「愛される者」は、二度と振り向いてはくれない。なぜなら、もうそこには何もないからであ

る。このことから帰結するのは、「愛される者」の「愛する者」への移行という愛の奇跡が、二人の関係の死そのものを意味するということである。だが、この悲劇的な転移の結末は、実は倫理的な行為でもある。というのも、「愛する者」と「愛される者」の一致を、永遠にしたいのであれば、それは心中という旧いかたちの現実的な死を選択しなければならないからである。たとえそれがどのような悲劇的な末路を辿るのであろうと、――実際、ソクラテスは毒杯を仰ぎ、アルキビアデスは暗殺されるのだが――転移の後に生じる関係性の破綻は、「愛する者」と「愛される者」に別の生を展開させるものでもあるのだ。

3. 愛することへの恐怖

上記のラカンによる転移概念の理論を土台に、ここからは『草の花』の作品内部の分析を行っていく。「第一の手帳」において汐見は、超越的世界を憧憬する典型的なプラトン主義者として描かれている。

> ［…］見える世界から見えない世界にはいって行く、それが愛なんだよ。愛するということは世界を創り変えてしまうんだ。もし君が愛した、……いいかい、その時には人間の経験を絶したイデアの世界に僕等の魂が飛翔して行くんだ、時間もなく、空間もなく、そこには永遠の悦びがあるんだ……。
>
> ――汐見さんの好きなプラトーン……。
>
> ――分からないかなあ。
>
> ――分かりません。
>
> ［…］
>
> ――どうして分らないかなあ。愛することによってのみ、僕たちは地上の孤独からイデアの世界に飛翔することが出来るんだ。その中でこそ真に生きられるんだ。それなのに君は、……
>
> ――でも僕はこのままでいいんです、と低い声で藤木が言った、汐見さんの言うのは言葉だけ、空しい言葉だけの……。
>
> ――ねぇ藤木、僕は真面目なんだよ、不純な気持ちなんて全然ないんだよ。
>
> ――不純てどういうことなんですか？
>
> うん、と言ったなり、僕は詰ってしまった。（全集二、三四五頁）

ここには、プラトンが『パイドン』においてソクラテスに語らせている「この世からあの世への移住」（117c）[21]という魂を此岸から彼岸の精神世界へと導く超越への道行きが示されている。ここでの汐見プラトン主義者とするのであれば、「パイデイア」として年下の美少年である忍の魂を、まるでソクラテスのように教導しようとしたという見方が可能である。かりにそうだとすれば、それは「愛する者」のエゴイズムというよりもむしろ教育であったと言える。つまり、プラトンに由来し、キリスト教に受け継がれた「回心 conversion」[22]、すなわち地上の世界から天上的な世界への向き変えによって汐見は忍の魂を救済しようとしたのである。じじつ福永自身も、『愛の試み』において愛することを非利己的な行為に位置づけていた。というのも、彼によれば、「愛の本質は、この対象のために、自己が自発的に相手の孤独を所有しようと投企する行為にある」（119）からである。福永はさらに次のように述べている。

> 愛の効果は、相手の魂を所有したいというこの熱狂と、自己の孤独を認識するこの理智との、その両者に公平に懸っているのだ。決してその何れかに偏することはない。そして人が自己の孤独に気づく機会が、逆境にあったり、苦しみを感じたり、死を予感したりする悲劇的な瞬間ばかりでなく、愛するというこの積極的な行為の瞬間にもあるというのは、実は大いに悦ぶべきことなのだ。なぜなら、彼は自己の孤独に思い当るが故に、愛する対象の持つ孤独についても同時に考え及ぶ筈なのだし、自己の傷を癒す前に、まず相手の孤独を癒してやろうと考えることが、愛を非利己的なものに高めて行く筈なのだから。（全集四、四六一-四六二頁）

だが、ここでの汐見の言い分に違和感を感じる者もまた多いだろう。というのは、プラトンは『饗宴』において、愛とは固有名をもつ誰かを愛することではなく、それを超越した美のイデアそのものを愛することの本性としていたからである。じじつ、ソクラテスはアルキビアデスと決して愛し合おうとはしなかった。だが汐見は、藤木という存在者の肉体をも愛していたように思える。汐見に本当に「不純な気持ち」がなければ、こうした言葉が口をついて出ることもなかったであろう。実際に福永は折口信夫に依拠しながら、古代において、「肉体的なものと精神的なものとが、観念的な操作を伴うことなしに、直ちに結びついている」（全集四、四四九頁）という点を指摘していたが、さら

に次のようにも述べている。

> 人は愛する時に、わざわざ苦しみを求める馬鹿はいない。誰しも、愛の中に肉体の快楽を、――しからずんば一種の肉体的快楽を、期待して愛し始めるのだ。謂わゆるプラトニック・ラヴと呼ばれる恋愛に於ても、それは愛する者にとっての密かな快楽を、目的のうちに隠し持っている筈だ。ただそれが肉体的な逸楽と違うところは、この種の快楽はそれがすべて精神の単位に、観念に、還元できるものであり、愛する者はその快楽が、すべて観念的だと錯覚していることにあるのだ。（全集四、四四五頁）

このように福永が考えていた以上、たとえば小林翔子のように汐見と忍の関係が「「同性愛」ではない」[23]と断言してしまうのは難しいと言える。いずれにせよ、汐見は、「愛する者」として「愛される者」たる藤木忍の存在そのものを愛していたのであり、彼と愛し合うことができなかったことを激しく後悔しているのだが[24]、このような対象の固有性への価値づけは、福永自身が強調していたものであった。というのも、彼は肉欲ではなく、魂を愛するのだと言いつつも、「[…] 対象は先天的に定められた或る一人、宇宙のどの方角でもない特定の或る一角へ向けて、翔って行かなければならない。彼の求めるものは今迄知ったような一般的な愛ではなく、必ず特殊の、未知の、対象であるべき筈だ」（全集四、三八三頁）と述べているからである。福永においてイデア的なものへの飛翔は、ある特定の対象を規定することによってなされるのである。

しかし藤木忍は、「僕は誰も愛し得ないんです。僕は愛するということの出来ない人間なんです」（全集二、三四六頁）と言い、汐見の愛を拒絶している。ここで注目しなければならないのは、藤木忍がたんに汐見の存在だけではなく、愛することそのものを拒んでいたという事実である。つまり、汐見という個人の愛を受け入れなかったというよりも、より正確には、愛するという能動性そのものを藤木忍は拒絶したのである。ラカンが転移の本性に位置づける「愛される者」から「愛する者」への変容という主体の経験そのものの根源的な転換、ないし回心の手前で、「愛する」という行為それ自体に藤木忍は尻込みしていたのである。もちろん愛する者としての汐見の強引さを無謬であるとは言わないが、少なくともラカン派的観点から言えば、愛するという行為を極度に恐れた藤木忍は、転移の可能性をはじめから放棄しているという点において責めに値するのだ。

4. 可能な身体、「愛する者」への変容

上記のような忍との関係とは異なり、汐見と千枝子の二人は、ラカン的な意味での「転移」関係を結実するものとなる。従来の研究においては、プラトン主義者としての汐見と無教会キリスト教の信者である千枝子の教義的な行き違いから、二人の関係の不全と不毛性を解釈するものが少なくない。しかし、作品内で繰り返されるこうした思弁は、――ラカンが「愛される者」が「愛する者」へと変容する条件とする――千枝子が性的羞恥心を捨てて、身を捧げようとするその瞬間にどうでもよいものになる。次のような場面は、まさしく彼女が「愛する者」へと変容を遂げた瞬間である。

> そして僕等は絡み合ったまま倒れていた。僕は片手でその髪を草の茂みから支えるように抱き、空いた手を彼女の胸の上に置いた。呼吸の度にその胸はゆるやかに盛り上った。
>
> ――あたしのお乳、こんなに小さいのよ、と小さな声で千枝子が言った。
>
> そう言うなり、恥ずかしくてたまらないように顔を僕の方へ埋めて来た。その小さな暖かい乳房、僕の嘗て知らないもの、それは僕の情熱の全部を沸騰させるのに充分だった。僕は狂おしく彼女の唇を求めた。一切が僕等の廻りで死に絶え、ただ僕等だけが生きていた。僕の唇は彼女の唇を求めた。僕の唇は彼女の唇に、僕の胸は彼女の胸に、僕の腹は彼女の腹に、僕の脚は彼女の脚に、一つに触れ合い、絡み合い、膠着した。それはすべてが可能な瞬間だった。僕の腕は可能の腕、僕の身体は可能の身体だった。千枝子は無抵抗に、僕に抱かれたまま眼を閉じていた。（全集二、四六三-四六四頁：傍点引用者）

たとえば、畑有三のように千枝子の「精神性に傾斜していた」[25]側面にのみ着目するだけでは、性的羞恥心を忘れ、身を投げ出した彼女の行為の意味が理解できなくなってしまう。ここで千枝子は、もはやキリスト教の信仰を巡る思弁など忘却し、性的羞恥の矩を踰え、自分の胸の小ささを言い立てている。そして、完全に肉体を、神ではなく汐見に対して捧げ、彼にはすべてが可能になる。まさしくこのシーンこそ千枝子が、「愛される者」から「愛する者」へと変容した瞬間であると同時に、汐見が「愛する者」から「愛される者」になったことを示す指標となる。「……少女は永遠を待っていた。この大きな

掌のような夜が一切の星座を統べながら次第にそのひろがりを閉じ、やがては暁の爽かな薄明が東の空に星々のまどろみを消し去って行くその時に、……」(全集二、四四三頁)というこの出来事以前に千枝子が読んだ汐見の草稿に書かれたこの願望は、忍に愛されることがなかったときとは異なり、成就するのである。だが、「愛される者」となった汐見は、「愛する者」の欲望である永遠を拒絶してしまう。なぜなら、ここで欠如する主体となった「愛する者」としての千枝子は、充溢した主体へと変容した「愛される者」としての汐見が欲したものをもはやもっていないからである。「愛される者」は「愛する者」の立場から見れば、完全に満たされた主体であり、そこに欠如がない。一方で、「愛する者」は自らに欠落の不完全さを感じるがゆえに、「愛される者」を愛する。上述したように愛が不可能であるというのは、「愛する者」と「愛される者」のあいだに根本的な不均等が存在するからこそなのだ。

先行研究は「愛する者」から「愛される者」となった汐見、そして「愛される者」から「愛する者」になった千枝子というこの転換を見逃してきた。たとえば、梶谷哲男は汐見を評して、「愛を永遠なものに抽象化し、純潔を、女性的なものを愛したが、血の通った異性としての女、肉欲の対象としての具体的な「おんな」を愛することができなかったように思われる」と述べ、その性的不能を「母を失って正常な性愛の発達を遂げえなかった武彦の生育史の歪みから必然的に生み出された孤独」に還元している[26]。だが、千枝子と汐見のあいだには身体的な接触が数多くあること、それを基本的には汐見の側から求めていることを考えれば、母の不在という生育歴の歪みにこの問題を矮小化してしまうのには違和感が残る。

一方で首藤基澄は、千枝子との関係では梶谷同様に「母の不在」[27]を汐見の不全の根拠としながらも、忍との関係における汐見については、「汐見がイデアとしての愛を語れば語るほど、「永遠の悦び」は肉体の問題として還流してくると思う」[28]と指摘し、忍の拒絶は、肉体として求められること、すなわち同性愛へ踏み込むことへの拒否であったのではないかと考察している。周知のように、プラトンの美のイデアに関する教説が肉体に美を感じることから始まることを考え合わせるのであれば、汐見の愛もまた肉体への性的欲望からはじまっていると言える。そして首藤は、「汐見の愛への投企が純粋性を保つためには、藤木の拒否が是非とも必要であった」とし、彼らの「不可能な愛」はその拒絶によってこそ、完成されると主張している[29]。一方で千枝子との関係においては、性的欲望をもちつつも汐見が彼女に対して一歩踏み越えることができなかった理由を、彼

の「英雄の孤独」への固執に見出し[30]、福永自身を「単独者」[31]として規定する。ここで首藤も、千枝子の「愛する者」としての主体性を見落としているとように思われる。千枝子と汐見の関係性は、千枝子が性的羞恥心を捨て、身を投げ出し、純粋な「愛する者」へと変容したからこそ、不可能になったのである。愛の不可能性というよりも、より正しくは愛の一致、すなわち「愛する者」と「愛される者」の合一の不可能性を、「英雄の孤独」、ないし「単独者」という汐見の視点からだけ見るのでは、その本質を掴むことはできない。純粋さは決して汐見の「英雄の孤独」にのみあるのではない。すなわち、あくまでも二人の関係性の終局としての「愛する者」と「愛される者」という双方の置き換わりの瞬間たる「転移」にこそ純粋性を読みとるべきなのであり、それはまた瞬間的なものでしかないのだ。

ところで、たとえば熊坂敦子は汐見のみならず、この愛の不成立の一端を千枝子のエゴイズムに帰している[32]。そのような解釈は、「愛する者」として性的な羞恥を超克し、汐見にその身を投企した彼女の勇気をあまりにも軽んじているのではないか。というのも、看取する必要があるのは、忍にできなかった「愛される者」から「愛する者」への変容を、千枝子が成し遂げたという事実にあるように思われるからだ。「愛する者」から「愛される者」になった汐見は、「愛する者」としての千枝子を「愛される者」として拒絶する。だが、「愛する者」としての千枝子と同様に、「愛される者」としての汐見もまたこれまでの先行研究においては見過ごされてきた。たとえば、小佐井伸二は「愛する者」としての福永文学の男性を強調し次のように述べている。

> 「海市」の主人公は言う。「僕は愛されるのは嫌いだ。[…]」。恋愛におけるこのような姿勢は、「海市」の主人公だけのものではない。福永武彦のおそらくすべての人物たちに共通する、「風土」の画家から「死の島」の青年まで。そして、「冥府」のなかでただひとり新生を許されるのが「愛しすぎた者」であつたことを思い出そう。[33]

たしかに、福永文学における男の多くは、愛する者として描かれるが、しかし注目すべきなのは、『草の花』において忍に愛されることのなかった汐見が、千枝子には愛されていたという事実なのである。実際に千枝子は、「わたくしは汐見さんを愛する時、その蔭にある兄を感じ、亡くなった兄を憎みました」（全集二、四九五頁）と手紙のなかで吐

露している。また千枝子の友人とし子は、「あの人は僕を愛してなんかいないんですよ。」と嘆息する汐見に対し、「――そんなことはありませんわ［…］千枝子さんがあなたのことを想っていらっしゃるのは、もう決して間違いのないことですわ。あたくしはいつでも感じていましたわ。」と、強く否定している（全集二、四七三頁）。したがって、汐見が「愛する者」から「愛される者」へと位相を変えられているという証をここでも確認することができる。藤木千枝子は、「愛される者」としての充溢した主体から「愛する者」としての欠如の主体へと変容を遂げたがゆえに、汐見茂思によって愛されなくなった。だが福永自身は、情熱が燃え尽き、灰になってしまうような終わりに対して、肯定的な意味づけをしていた。

> 情熱の完全な燃焼とは、彼等が理性を盲目ならしめることを意味するのではなく、自己の孤独を充実せしめて、自己を新しく創造することにある筈なのだ。快楽というものは、その時目的ではない。自己の燃焼感そのものが、精神の悦びの中に還元されて、彼の生きる意志を強くするものでなければならない。愛は火花のように燃え上がるが、しかしそれは燃え尽きるためにではなく、絶え間なく燃え続けるために、常に焔としてあるために、生の動力として燃えるのでなければならない。しかし愛は、快楽を媒介として、常に死、――魂の死を、深淵のように覗かせているのだ。（全集四、四五一-四五二頁）

たしかに彼らの生への情熱が、このときのように燃え盛ることは、その後の人生において無かったのかもしれないが、より自己自身の孤独を凝視することができるようになり、いかに不幸であろうとも、「自己を新しく創造すること」に成功しているように思える。つまり、二人は変わらなかった藤木とは異なり、愛のポジションの転換によって、自己自身を変容させることができたのである。実際に、千枝子が新たな他者たちとの生活をつつがなくこなしていく一方で、汐見は戦地に赴き、帰還後のサナトリウムでの生活においてもあらゆる努力によって、しかも周りからは平静に見えるように自己を制御しつつ、愛の喪失と孤独を超克しようと試行錯誤していた。こうした事態にもかかわらず、小佐井はプラトン主義者としての汐見を「エゴイスト」であると断じてしまっている[34]。しかしながら、上記のことを考慮するのであれば、千枝子への汐見の愛を、彼のエゴイズムに還元するのはあまりにも一方的な解釈であると言えよう。

むしろ、すべてが可能であったにもかかわらず、千枝子から身を引いた汐見の選択は、倫理的なものであったのではないか。というのも、転移性恋愛の完全な帰結、「愛する者」と「愛される者」との合一は、三島由紀夫が『盗賊』で描いたような心中という形式においてしかありえないからである。福永自身も「死を前提とした愛は、なるほど見た眼には美しいかもしれないが、現実としては少しも美しくはない」（全集四、四五九頁）と述べている。汐見が千枝子との関係を成就させなかったという選択は、エゴイズムではなく、「愛する者」と「愛される者」の不一致という転移性恋愛のかたちを尊重した倫理に準じた行為なのである。つまり汐見は、「死」というかたちでの合一を回避し、愛の喪失を抱えつつも別の生を展開するために、関係を中吊りにすることを選択したのである。その帰結として、見かけの上では平凡な幸せを手に入れた千枝子は、汐見のことを忘却しないまま緩慢な苦悩を背負い続ける。じじつ、千枝子は手紙のなかで次のように書き綴っていた。

> わたくしも、一人の主婦として、一人の女の子の母親として、いろいろの苦労をいたしましたものの、ひとめには平和に、幸福そうに暮しております。それでも折につけて、節子がお人形遊びをしながら独り言を言っているのを聞く時や、主人の脱ぎ捨てた洋服を洋服掛けに掛け直している時などに、なぜともなく、ふっと現在のこうした暮しかたがまるで間違っているのではないかと、たまらなく心の空しく感じられる時がございます。（全集二、四八八頁）

しかしながら、この千枝子の不幸は、情熱の終わりという失望のなかでも別の生が切り開かれたことを表現してもいる。一方で、汐見も決して自ら命を断つことなく、その生を偶然へと賭ける。その「賽の一振り」の結果は、彼を死に導くに至ったが、それを単純な自殺として解釈するべきではなく、また彼の敗北としてもならない。というのも、すでに西田一豊が示唆していたように、「偶然性に自らの生死を委ねることこそ汐見が望んだことのように思われる」[35]からである。したがって、上述した畑のように、[…]汐見は過去の観念的で現実をとり落としていた自分への自己処罰として死を選んだ」[36]とする解釈と、本稿は異なる立場をとる。

そうした主張をより理論的に根拠づけるために、かつてドゥルーズが『差異と反復』において語っていた偶然と賭けに関する超越論的な問いを想起しよう。彼は「偶然が十

分に肯定されれば、賭ける者はもはや負けることがない（Le hasard est-il assez affirmé, le joueur ne peut plus perdre）」[37]とまで言っていた。彼がそこまで断言できるのはこの賭けが、経験的実在を超え出ている超越論的な次元におけるものだからなのであるが、少なくとも偶然性に賭けるというその行為が、自殺という自らの運命を確実に決定してしまうやり方とは程遠いものであることは確かである。「賭ける」を意味するフランス語の jeu は、同時に遊び、ないしゲームのことを意味する。「賭け＝遊び」が人を楽しませるのは、それが決して必然でも運命でもない、つまり勝つのか、負けるのか、そして救済されるのか、破滅するのか、そのどちらに転ぶかが未決定のゲームであるからこそである。結末をすでに決められてしまったようなゲームほどつまらないものはない。決定されたものとしての必然が固定され不動のものであるのに対し、「賭け＝遊び」はその超越論的な偶然性ゆえに、システムそのものを変形させうる可能性をもっている。だからこそ、ドゥルーズは「賽の一振りは、一回で偶然を肯定するのであり、賽の一振りそれぞれが、そのつど偶然の全体を肯定する（Le coup de dés, au contraire, affirme en une fois le hasard, chaque coup de dés affirme tout le hasard à chaque fois）」[38]と言い、「賭け＝遊び」の超越論的な偶然性を全面的に肯定したのである。賭けをすることの価値は、自殺のように自分自身の運命を確実に決定するものではなく、愛することと同じように、決定されていないものの可能性に賭け、その度ごとに世界のあり方が変容するという点にある。実際に福永自身も、愛することと「賭け」を並置し、次のように語っていた。

> 愛することは常に危険を孕んでいる。それは一種の賭、失敗の恐れを多分に含んだ、しかしひょっとするとこの孤独から逃れて、魂の安らぎを得ることが出来るかもしれぬ賭である。従って愛することは、常に賭けをする者の不安と危惧とを彼に与える。（全集四、三九七頁）

賭けはたしかにひとを救いもすれば、破滅へとも追い込む。忍との関係から賽が投げられた汐見の愛するという賭けは、最終的に死という非人称の底へと彼を沈ませる結果になったのであるが、その「賭け＝遊び」は、彼の周囲にいた人物、忍や千枝子のみならず、物語の語り手である「私」も含め、彼らの生のシステムを根本的なかたちで揺るがせたように思える。少なくとも、彼らがいる世界の様相を、その「賭け＝遊び」は、大きく変容させた。賭け事の本性として賭けられるものが大きければ大きいほどその利

益も損失も莫大なものになる。しかし、そのプラスとマイナス、計算可能な収支が本質的な問題なのではなく、汐見の賭けという出来事そのものが、周囲の人物たちの精神に変形を生じさせたというその事実が肝心なのである。もっともたんなる自殺であったとしても周囲に影響を及ぼすのであろうが、それは未来を確実なかたちで本人が決めることとしての必然性であるがゆえに、諦めを誘うものでもあり、また何よりもそれは偶然を排除する以上、断じて賭けとは呼べない。

汐見の最後の賭けはまた、彼が生きようとしたのか、死のうとしたのかという問いを永遠に突きつけたままにする。この未決定の宙吊りの倫理こそが、偶然性に身を投げる汐見の賭けに勝利を呼び寄せる。ドゥルーズは、「良き賽の一振りは、偶然の全体を一回で肯定するのであって、そこにこそ、問いと呼ばれるものの本質がある（le bon coup de dés affirme tout le hasard en une fois ; et c'est là l'essence de ce qu'on appelle question）」[39]と述べていたが、汐見は「愛する」ということの偶然性に賭けたのとの同じような意味で、「手術」というゲームに身を投じることで偶然に賭け、「問い」というかたちで他者たちに大きな影響を及ぼすことによって彼らの世界の可能性を変形させえたのだ。

5. おわりに

たとえば本稿が論じてきた偶然性に賭ける汐見の英雄性の根幹を、三島由紀夫は書評「「草の花」――福永武彦著」（〈初出〉『群像』・昭和二九年七月）において、二つの恋愛ではなく、戦地での経験に見出し、その場面を描かなかったことを作品的な瑕疵として言い立てている[40]。たしかに、戦争経験が汐見の人格に影響を与えなかったとは言えないだろう。しかし、この作品の本質はあくまで二つの恋愛であると我々は考える。他方、「第一の手帳の Knabenliebe は極めて美しく描かれている。近代日本文学で、かほど美しく描かれた「美少年録」を私は知らない。私も一読者として殆んど藤木に恋着したのであった」[41]と述べられていることから判明であるように、三島は第一の恋愛だけを強調し、第二の恋愛がもつ価値を無視している。だが、三島の言うとおりに戦地での汐見を語ってしまえば、この第二の恋愛の存在感は薄まってしまうはずである。少年愛と戦争経験を重視する彼の批評は、上記に挙げた先行研究と同様に千枝子と汐見の恋愛を軽く扱うがゆえの結論に過ぎないのではないか。いずれにしても、三島は忍と千枝子との愛における汐見のポジションの違いがもたらす意義を理解していなかった。「愛されなかった」と繰り返す汐見本人の弁明がどうであれ、汐見の最後の賭けは、「転移」によるポ

ジションの置き換えによって新たな生を獲得したからこそ可能になった意志の発露だった。千枝子の愛によって汐見が「愛される者」へと変容し、転移による不一致が生じなければ、たとえば三島が『盗賊』において描いたような心中による愛の永遠性の獲得、すなわち運命の必然性への堕落か、あるいは、『潮騒』のようにたとえ愛の一致に至るまでの道のりがどれほど美しいのだとしても、おそらくは愛のない結婚生活しか予感されない陳腐なハッピーエンドにしかたどり着かなかっただろう。すなわち汐見の英雄性は、軍人的な潔さなどではなく、転移の愛において凝固した瞬間を真実のものとするために、心中も平凡な家庭の幸福も、そのどちらをも選択しなかった彼の倫理に由来するものなのだ。

愛する者として藤木兄妹を愛し、最終的には愛される者となった汐見は、サナトリウムで成功の見込みがごく僅かな手術に身を投じることで、その生の終わりに至るまで偶然に賭けることをやめなかった。汐見に英雄的な側面を見てとるとすれば、それは彼が孤独を選んだからではなく、策略と計算に満ちた財の獲得という次元を越え出たところにある「転移」という愛の形式を顕現させえたことにある。「愛する者」と「愛される者」の関係が真に本来的なものであるとき、二人の関係は必ず壊れるというのがラカンの根本的な立場であった。そのような意味においてこの作品を解釈するのであれば、「愛される者」に留まった――三島がその美しさに恋着した――忍とは異なり、「愛する」ことの偶然性に賭けた汐見と千枝子は、いかに不幸な運命を辿ろうとも、それでも愛するという偶然性、すなわち転移の可能性に身を投じたというその一点において十分に勝者と言いうるのである。なぜなら、汐見がかつて忍に語ったように、「愛するということは世界を創り変えてしまう」（全集二、三四五頁）ことだからである。

註

[1] 福永武彦『福永武彦全集四』、新潮社、一九八七年（初出 『文藝』一九五六年一月号より六月号まで連載（六回）、題名「新恋愛論」。単行 福永武彦『愛の試み』、河出書房、一九五六年）。以下、『愛の試み』の引用はすべて『福永武彦全集四』に依拠する。なお福永武彦全集からの引用は、すべて旧字体を適宜、新字体に改め、ルビは省略した。

[2] 福永武彦『福永武彦全集二』、新潮社、一九八七年。（初出は、単行本『草の花』初版。新潮社、一九五四年）。以下、『草の花』の引用はすべて『福永武彦全集二』に依拠する。

[3] 田口耕平『「草の花」の成立――福永武彦の履歴』、翰林書房、二〇一五年、一二二頁。

[4] 小佐井伸二「福永武彦における恋愛――『草の花』と『海市』のひとつの読み方」(『国文学――解釈と鑑賞』一九七四年二月)、六四頁。

[5] 白川正芳「孤独な人間の眼、固有な時間」(『国文学――解釈と観賞』一九八二年九月)、三三頁。

[6] アルキビアデスについては、次のような研究がある。Cf. Jacqueline de Romilly, *Alcibiade, ou, Les dangers de l'ambition*, Paris, Fallois, 1995.

[7] Jacques Lacan, *Le Séminaire VIII: Transfert 1960-1961*, Paris, Seuil, 2001, pp. 46–47. 以下、この講義録からの引用は、巻数であるローマ数字で略記し、ページ数と共に本文中に記す。なお、本稿の訳出は既訳(『転移(上、下)』小出浩之[ほか]訳、岩波書店、二〇一五年、四九頁(上))を参照しつつ、著者が訳出している。

[8] *VIII*, p. 53.[五八頁(上)]

[9] *VIII*, p. 53.[五八頁(上)]

[10] *VIII*, p. 53.[五八頁(上)]

[11] *VIII*, p. 11.[三頁(上)]

[12] *VIII*, p. 53.[五九頁(上)]

[13] プラトン『饗宴/パイドン』朴一功訳、京都大学出版会、二〇〇七年、一三頁。

[14] *VIII*, p. 164.[二〇五–二〇六頁(上)]

[15] *VIII*, p. 164.[二〇五–二〇六頁(上)]

[16] *VIII*, p. 433.[二六二頁(下)]

[17] 饗宴が行われたこの十数年後に、ソクラテスはアルキビアデスとの親密な関係を一因として毒杯を仰ぐことになり、アルキビアデスもまた非業の死を遂げる。

[18] *VIII*, p. 420.[二四四頁(下)]

[19] *VIII*, p. 420.[二四四頁(下)]

[20] *VIII*, p. 263.[三四頁(下)]

[21] プラトン『パイドン』岩田靖夫訳、岩波書店、一九九八年、一七四頁。

[22] Cf. W・イェーガー『初期キリスト教とパイデイア』野町啓訳、筑摩書房、一九六九年。

[23] 小林翔子「福永武彦「草の花」論――「記憶」のなかの死者の「生命」――」、龍谷大学大学院文学研究科紀要(29)、龍谷大学大学院文学研究科紀要編集委員会、一五二-一六二頁、二〇〇七年、 一五四頁。

[24] 「藤木忍は十九歳で死んだ。その死に対する遣り場のない憤りは、今も、僕の心に焔のように燃えさかっている。何故に人はそのように若く死ぬのか。神もその才を妬むという言葉もあるが、神はこの美しい魂を、ただその記憶を純美に保たしめんがために、地上から奪い去ったのだろうか。美しい魂、それは恐らくは架空であり、今の僕には信じられぬ。しかし当時、藤木に寄せた僕の思慕は、鏡のように彼の美しさを映していた。思えば、後悔はすべて返らない、――彼も孤独であり、僕も孤独であり、しかも僕等は愛し合うことが出来なかった。それはなぜだったろう。僕に残るのは空しい疑問ばかりだ。」（全集二、三五五頁）

[25] 畑有三「『草の花』の誕生」（『国文学――解釈と鑑賞』一九八二年九月）、七七頁。

[26] 梶谷哲男「病跡学的にみた福永武彦」（『国文学――解釈と鑑賞』一九八二年九月）、四九頁。

[27] 首藤基澄「「愛の不可能性」――「草の花」――」（『福永武彦・魂の音楽』、おうふう、一九九六年、八七頁。

[28] 同書、八六頁。

[29] 同書、同頁。

[30] 同書、九二頁。

[31] 同書、同頁。

[32] 熊坂敦子「作品論――草の花」（『国文学――解釈と教材の研究』一九七二年一一月）、一二八頁。

[33] 小佐井、前掲論文、六二頁。

[34] 同書、六四頁。

[35] 西田一豊「作為された孤独――福永武彦『草の花』論」、千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書　(120)、五四-六四頁、千葉大学大学院社会文化科学研究科、六三頁。

[36] 畑有三、前掲書、七八頁。

[37] Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, Paris, Presses universitaires de France, 1981, p. 256.［ジル・ドゥルーズ『差異と反復』（河出文庫）、河出書房新社、二〇〇七年、八六頁（下）］

[38] *Ibid.*　［八五頁（下）］

[39] *Ibid.*, p. 259.［九二頁（下）］

[40] 三島由紀夫「「草の花」――福永武彦著」（『決定版三島由紀夫全集〈２８〉』所収）、新潮社、二九二頁。なお引用は旧仮名遣いを適宜、現代のものに改めている。

[41] 同書、同頁。